

人文の知で地域とつながる：  
静岡県立中央図書館と静岡県立美術館との連携  
(学習ネットワークと生涯学習：  
公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習16  
」)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平野, 雅彦, 岩科, 律子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008428">https://doi.org/10.14945/00008428</a>

## 報告 2

## 人文の知で地域とつながる

## ～静岡県立中央図書館と静岡県立美術館との連携～

平野雅彦（静岡大学教育学部特任教授・  
人文社会科学部客員教授）

岩科律子（静岡大学人文社会科学部4年）

平野——私は、静岡大学の教育学部の特任教授と、人文社会科学部の客員教授をしています。特任教授も客員教授も、研究室は与えられているのですが、実を言うと研究費がないのです。しかし、研究費がないから何もできないという言い訳をしていると、本当に何も残せません。極論するなら、大学にいる意味すらありません。私は研究費がなくても、思いと行動力さえあれば事は成し遂げられると考えています。

かといって私一人が頑張っても、これまた何もできません。一人でやっているとは結局一人でできることしかできないのです。そこで、学生たちや先生の協力を得て、いろいろなことに挑戦しています。

人文社会科学部で担当している「情報意匠論」は、「市民と静岡大学の共同企画講座をすすめる会（通称・アップレ会）」の寄付講座で成り立っています。静岡大学には、大学と地域との連携を助成してくれる仕組みがあって、そこに一回一回プレゼンテーションをして資金を得ています。

このように、いろいろなところから資金を獲得して、研究や実践をしています。その中で、今日は主に静岡県立中央図書館と、その隣にある静岡県立美術館との取り組みについて発表したいと思います。最初の県立中央図書館との取り組みについては、岩科律子さん（人文社会科学部4年生）に発表して頂きます。

### ■絵雑誌『あそび』の展示会

岩科——私は人文社会科学部言語文化学科4年の岩科律子と申します。よろしくお願いします。

私たちは、県立中央図書館と一緒に、『幼児指導絵本 あそび』（以下『あそび』）という絵本の展示会をさせていただきました。『あそび』は、絵雑誌といわれるジャンルのもので、薄い絵本のようなものです（図1）。多分、皆さんも幼稚園や保育園に通っているときに一度は似たような本を手にとっていると思います。平野先生がこういうものに興味があり集めていて、ある日、静岡で出版されていることに気付かれたのです。出版は、ほとんど東京や京都、大阪などの大都市で行われています。それなのに『あそび』は静岡で出版されている、調べたら面白いのではないかとということで、私たちの研究が始まりました。

『あそび』は、今から65年ぐらい前の1948年（昭和23年）から、1983年（昭和58年）まで作られていたものです。ですから、皆さんのお父さんやお母さんが静岡の中心で幼稚園に通っていたとしたら、もしかしたら子供のころに見ていたかもしれないという絵本です。すごく薄い本なのですが、その中に今でも有名な詩人のまどみちおさんの詩や、いわさきちひろさんの絵、皆さんは名前を知らないかもしれませんが、武井武雄さんや清水良雄さんといったひょうに有名な方のかわいらしい絵がたくさん載っています。

『あそび』は、皆さんも知らないように、私も全く知りませんでした。30年間ぐらい出版されていたにもかかわらず、地元静岡



図1 『あそび』



図2 元編集長への聞き取り調査

ではこんなに素晴らしい絵本があったということが、全く知られていないのです。そして、編集者の皆さまも、65年前の絵本なので、だんだんと高齢になっていらっしゃいます。『あそび』に係っていた人の話を聞くチャンスは今しかないということで、私たちが4年前から調べ始めました。

県立中央図書館は絵本の研究をかなりされているので、とても助けていただきました。そして、県立中央図書館で展示をさせていただくことで、日ごろ図書館を利用してくださる方が、ついでに見

ていってくれたり、ワークショップに参加してくれました。

図2の写真の真ん中に写っている女性が、平野ますみさんという『あそび』の最後の編集長だった方で、もう八十歳を越えています。

図3が、その展示会のチラシです。チラシに使った男の子と女の子の絵は『あそび』の表紙で、林義雄さんという有名な方が描いたものです。

図4はチラシの裏面で、右下の絵はいわさきちひろさんが描いたものです。

図5は、去年（2012年）の夏、9月3日から16日に行われた展示会の様子です。説明パネルを設置したり、ガラスケースの中に原画を展示したりしました。また、私たち学生スタッフが、『あそび』ってこういう絵本だったんですよ』と、説明して回りました。

図6は読み聞かせ、図7はワークショップの様子です。普段、大学にいるときに子どもに会うことはないのですが、ひじょうに貴重な体験でした。

図8は元『あそび』編集に係っていた方たちです。私たちが開いた展示会がきっかけで、いろいろな地方に散っていた方々がこれを機会に静岡に集結し、約20年ぶりに再会したということで、奇跡の再会の場に立ち会ったという喜びもありました。

**平野**——事前にいろいろ調べたのですが、われわれの方では編集に携わっていた人はたった1人しか見つけられませんでした。しかし、この研究発表をすることによって、実に20人近くの元編集者の人が、マスコミの報道を見て集まってくれました。県立中央図書館という公の場で展示会をすることによって、多くの方が注目してくださって、研究の可能性が大きく広がっていったのです。

**岩科**——静岡新聞にも大きく取り上げていただきました（図9）。新聞記事というのは、幅広い世代の方が見てくださって、しかも記録として残るので、かなり宣伝効果がありました。こうして取材していただくことで、地域の方々にそれまで知らなかった静岡の歴史や文化を知っていただき、また、それらを地域の図書館、美術館と協力しあって、更に深めていくことができるのです。

原画は、寄贈を受けたり、保育園で保管されているものをお借りしたりしたのですが、これからは原



図3 『あそび』展チラシ表面



図4 同チラシ裏面



図5 『あそび』展観覧風景



図6 読み聞かせ風景



図7 ワークショップの様子



図8 『あそび』の元編集者

画をきちんと保管することが大事です。また、図書館と共同の研究チームを作って研究を深めていくことも重要な課題です。私は4年生なので、今、20,000字（原稿用紙50枚）以上という厳しい指定を受けて卒論を書いているのですが、『あそび』の研究をしています。

また、原画をきちんと研究するという意味では、やはり美術館の協力が必要です。県立中央図書館、県立美術館、静岡大学という三者が連携できるといいなと考えています。

**平野**——実は、本の展示をするに当たっていろいろなところに調査に入ったら、千代田保育園を舞台にこの雑誌が編集されていたことが分かって、何とその保育園の納屋やお遊戯室の奥に、貴重な原画が放り込まれていたのです。60点ぐらいあったでしょうか。現在は約70点の原画が手元にあるのですが、この原画は、他の地域では文化財になっています。この発見そのものが既に大きな研究成果ではないでしょうか。

### ■『日本油彩画二〇〇年』で学生が行った解説

静岡県立美術館と「情報意匠論」は、連携授業をおこなっています。なぜ美術館と連携するかといえば、あらゆる学問をするにも、やはり美を見る眼、何が美しいのかを知ることが、とても大事なことだと考えているからです。例えば、一つの数式で解を求めるにしても、どう解いたら美しいかは、やはり人間としてものすごく大切です。ただ絵を見て、この絵が好きか嫌いかだけではなくて、その奥にあるもっと深いところを見る眼を養っていくというか、心を養っていく。そのために大学という組織は、本物を所有している美術館とつながることが、すごく重要なのです。

それからもう一つ大事なのが、シビックプライド（地域の誇り）です。聞き慣れない言葉だと思いますが、これは自分たちが住んでいるところに、こんなに貴重な財産、先人たちが作ってくれたものがあるのだということに誇りを持つことです。そういうものをきちんと学生のみんなに持ってもらうことを授業の目的にしています。

具体的には、県立美術館が行った「日本油彩画二〇〇年」という企画展で展示された100点ほどの作品の中から学生たちがそれぞれ気になった1点を選び出してそれを調査し、自分の考えを論じました。このチーム（7名）は、学生がKenbee（けんびー）と名付けています（図10）。県立美術館とミツバチのダブルミーニングですね。学生たちが、ミツバチのようにおいしいハチミツ（美しいもの）を探して飛び回っているといったイメージです。この活動では、普段は入れない美術館の舞台裏に入って、展示の様子なども記録しました（図11）。そして、最終的には市民の前で、それぞれの作品の解説を行い（図12）、その様子は「静大生が作品解説」という見出しで新聞の記事にもなっています（図13）。

図14は、ロダン館でギャラリートークを行ったときの様子です。彫刻を見るときには、実際にその彫刻のポーズをとってみることで、そのモデルの気持ちが分かったりするものです。



図9 「静岡新聞」(2012年8月26日付)



図10 キャラクター「KenBee」



図11 搬入作業の様子



図12 来館者向けギャラリートーク



図13 「静岡新聞」(2012年7月8日付)

参加した学生は、「調べてみると、知りたいことがどんどん芋づる式に出てきて、わくわくします」と感想を述べています。何かを知る、何かが分かるということは、次の分からないという扉が開くことなのです。そこに興味がどんどんわいてきて、「もっと知りたい」となる。与えられた情報を知識として得るだけでなく、自らそこに関わっていくことによって、もっと知りたいという気持ちがわいてくるのです。こうした活動が評価されて、2013年には、全国の美術館の学芸員が集まる大会でも発表の機会を頂いています。



図14 ロダン館でのギャラリートーク

今、多くの企業や地域の文化施設、あるいは大学が、皆さんのような高校生といっぱいつながりたいと思っているのです。可能であれば、私の授業でもぜひここにいる皆さんとつながって、いろいろなことができたらと思っています。

### ■その他の取り組み

現在も、「情報意匠論」ではいろいろなことに取り組んでいます。

図15はその一例です。人間国宝の芹沢銈介さんの作品を蒐集した静岡市立芹沢銈介美術館やテレビ局と連携するなどして企画を考えたり、あるいは、静岡大学そのものについて、もっと快適なキャンパスライフを送るためにはどうしたらいいのかを考察したりしています。また、静岡大学には日本国憲法の起草者ともいわれている鈴木立蔵先生がいらっしゃったので、その研究チームが立ち上がったたり、『あそび』を引き続き研究してくれるチームがあったり、静岡

#### 【現在「情報意匠論」が取り組んでいる課題】

1. 静岡市立芹沢銈介美術館との連携企画を考える
2. 静岡県立美術館との連携企画を考える
3. テレビ静岡（フジテレビ系列）との連携企画を考える
4. 静岡大学のキャンパス・サイン計画を考える
5. 憲法を再考する
6. 幼児指導絵本『あそび』の研究 ステージ2
7. 静岡のオーケストラを元気にする企画
8. ファミリーマートとの商品開発（「就職支援財団」の企画に参加）
9. 静岡市のまちづくりのPRを考え、催しに参画する
10. 静岡大学学食のオリジナルメニュー（地産地消）開発

図15 取り組みの一例

のオーケストラを元気にしようと考えているチームもあります。とにかくいろいろなプロジェクトが動いています。繰り返しになりますが、基本的に研究費なしで取り組んでいるのです。それを可能にしているのは、私たちはこういうことがしたいのだ、地域のためにこういうことを一緒にしたいのだという思いを、その研究や活動をする人たちに誠実に語りかけていくことで成立しています。それによって、普段できないことが大学という場ではどんどん可能になっていくのです。

### ■「情報意匠論」、普段からの取り組みの様子

以下、普段「情報意匠論」の学生たちがどんなふうに授業に取り組んでいるかを、一気に見ていきます。図16のように、みんなが話し合いをしていきます。話す・話す・話す。考える・考える・考える。場所を変えて、やはり話す・話す・話す。考える・考える・考える。研究室に来て、話す・話す。考える・考える・考える。飲む席でも、話す・話す。考える・考える・考える、の連続です。高校までの授業では、その多くが先生が前に立っていろいろなことを「教えてくれる」のですが、大学というところは違います。自学自習が基本です。自分たち



図16 話し合いの様子

がこういうふうになりたいのだ、こんなふうに考えているのだということを、学生同士がいっぱい話し合うことで成立します。そして、学生だけで解決しないこと、もっと深めたいことを教員が手助けしたり、外とつながることで深めていく。自分たちだけでやれば、それはそれなりの形になります。しかし、外の力

を借りることによって可能性をどんどん広げていく。そういったことに私は挑戦していきたいと思っています。

またみなさんと一緒に考えていきたいと思います。